

画面自動変化計画 17人による白の空間展カタログから

米倉 徳

或る本の中に時計の文字盤はなぜ、右まわりなのか、と書いてあった。

確かによく考えてみれば、文字盤の3時と9時の位置が逆になって左まわりであっても、いささかも差し支えない。併しながら世界中の時計の文字盤は全部右まわりである。

ところが南アフリカのケープタウンでは、絶対に左まわりの時計が有ると読んで驚いた。ケープタウンの街では、山に当る日は海側から当るそうだ。すなはち山は街の南側にあり、海は街の北側にあるので日が街の北側から当る。と云う事はケープタウンの港は北に向って開いた港だそうだ。

地図で見ると南アフリカの南端にある港だから、当然南側に向って開いている港だと錯覚をする。ところが南半球の北側に向って開いている港町なので此処の公園にある日時計は3時と9時の位置が入れ替って左まわりの日時計になっているそうだ。以上の事は我々は常日頃、非常に表面上だけの常識？で物事を判断している事の危険さを示唆しているのではないだろうか。「白の空間展」も字づらだけ見れば「白」と「空間」との具体的なイメージから作品の内容が連想される。がこれは出品各作家の中なる「白の空間」であって、3時と9時の位置が入れ換るが如く、必ずしも「白」を意味しない。私にとって今回の「白の空間展」は、実体と「影」若しくは「光」との中間に存在す「物」とは、いかなる存在となり得るのかを見たい試みである。作品とそれに相対する人との中間に他の物体が介入すると、その関係はどの様に変化するのか。これは日常的にも、しばしば起っている事だが、例えば映画館の映写中の光線の中に手を差し出せば、大きな手が画面に映し出されて、映画そのもののストーリーは当然、変化を余儀なくされる。

同じ様に、展覧会の「絵」の前に人が立ち塞がれば、「絵」と「絵をみている人」とのコミュニケーションは断ち切られる。併し、立ち塞いだ人も又「絵」の一部となる作品であれば此の問題が解決するのではないだろうか。白の空間展の中で「私の白の空間」としての可能性をその様な試みで追求してみたい。